

吉田 司さん ノンフィクション作家

時は乱世。出でよ異論奇論！（上）

「がんばろう東北」「日本はひとつ」は、いまや日本人の合言葉のような観を呈している。「ここに異論を投げかけるのが吉田司さんだ。」「がんばろう」の視点は、とても簡単で、お決まりの着地点で、安心な視点にすぎない。二回にわたって吉田さんの東北、日本、そして人間へのまなざしを聞く。

東北はもはや植民地ではない

——今回の震災に関する言論人やメディアの発言について、吉田さんはかなりご立腹のようですね。

世の中全体が「脱原発」一色に転向しちゃったもんだから、誰もが「金太郎アメ」みたいになって、サツパリ面白くない。天変地異の時代はやっぱり「百鬼夜行す」が原則でしょう。でもその百鬼が、どこにもいない。同調圧力が強まる一方です。朝日新聞の復興計画キャンペーンなんか『ニッポン前へ』委員会提言

か聞こえない。東北が東京をはじめとする関東圏の電力を担っていることについて、東北がツケばかり払わされていると言っているのはわかりますが、でも「東北国内植民地論」が成立したのは、バブル時代までですよ。バブル崩壊後のデフレの二十年で、日本は「漂流日本」となった。そこで小泉政権の新自由主義に出会ったのですが、新自由主義、つまり市場原理主義の日本は多国籍企業を育て、派遣労働を生み出します。それは中国（＝世界の工場）と同レベルの低賃金を実現するためですが、その結果、日本の工場は、国内産業のため



●よしだ・つかさ 1945年山形県生まれ。早稲田大学在学中に映画監督小川紳介らと小川プロを結成し、『三里塚の夏』などを制作。70年から水俣に移り住み、水俣病患者らと「若衆宿」を組織し、88年、水俣での経験をまとめた『下下戦記』（白水社、文春文庫）で大宅壮一ノンフィクション賞を受賞した。近著に『王道楽土の戦争～戦前・戦中編』『王道楽土の戦争～戦後60年編』（NHK ブックス）、『カラスと鬮籠』（小社刊）など。

ですからね。「軍隊か、お前は！」てな調子ですから（笑）。おまけに誰もが、「ああ、昔そんな反原発の言葉言ったり聞いたりしたよな……」ってレベルのリバイバルソング、既存の言説を反復しているだけでしょう。そうして「ひとつになろう」というお決まりの着地点に落とし込み、安心感を得ようとしている。

たとえば、『望星』七月号の山折哲雄さんと赤坂憲雄さんの対談「『反欲望』の時代を拓けるか!？」の中で、「東北は植民地」「中央から見下されたみちのく東北」などの発言があったけれど、僕にはそれもただの東北の収奪された歴史を繰り返して語っているだけにし

の工場という枠を飛び越えて、世界をまたにかける工場になってしまったのです。

いま東北に密集している自動車産業を中心とした半導体と精密部品の物流工場も、実は世界の工場的一端なのです。

——そういう意味では、東北はいまや世界経済に影響力を持っていると言える。

震災の影響で、トヨタ・日産ばかりかアメリカGMやフォード、東南アジア、ヨーロッパ市場に至るまで、世界の自動車生産ラインが一斉にストップしてしまっただことを見ても、よくわかります。だから東北は、もはや国内植民地という枠組みに収まり切る存在ではない。しかし東北人は、世界経済をダイレクトに混乱に陥れられる力を持っているとは気づかず、自分たちは奪われるばかりだという視点しか持たない。

震災のあった次の日に、アメリカが出動要請もないのに「トモダチ作戦」を発動したのも、東北が世界市場だからです。震災によって追いつめられた日本が、米国債を売ろうという姿勢をみせようものなら、ドルは大暴落